

# 擬「サ詠嘆法」

濱中 誠

## Pseudo-“Sa-eitanhou : Exclamatory expression ‘sa’”

HAMANAKA, Makoto

### 1. はじめに

本稿は、九州肥筑方言域で用いられている「サ詠嘆法」と同一視されることの多い、次の例に見られるような表現、

(1)コン海ノ深サ深サ!〔秋山(1969)462頁〕

について、私見により擬「サ詠嘆法」と仮称し、これまでの先行研究によって記述された「サ詠嘆法」の実例と対照することによって、「サ詠嘆法」・擬「サ詠嘆法」の両者の異同を明らかにすることを試みるものである。

本稿では、濱中(2012)に従い、「サ詠嘆法」の実例「夕陽ノアカサー」の一部である「アカサー」のような形式を「-サ」と表記する。これに対し、上例(1)の「深サ深サ」のように「-サ」を繰り返す形式を「-サーサ」と表記することとしたい。

「-サ」を用いる「サ詠嘆法」と「-サーサ」を用いる当該表現とは、同一の事象であるということが自明のこととして扱われてきたためであろうか、「-サーサ」を用いる表現だけを取り上げて、もしくは、「サ詠嘆法」との対照をすることによってその実態を明らかにしようと試みる先行研究は、管見の限り見られなかった。そこで本稿では、これまで「サ詠嘆法」と同一視されてきたと見られる「-サーサ」を用いた表現について、文法的・表現的特質を記述し、この表現を「サ詠嘆法」と同一事象として扱って良いものかどうかについて考察していきたい。

この考察のため本稿では、第2章で「-サーサ」に言及のある先行研究の論考を整理し、第3章では記述に用いる実例などのデータを収集した調査の概要を示したい。第4章からは擬「サ詠嘆法」の実態について、第4章で音声、第5章で文法、第6章で表現のそれぞれの面から明らかにし、「サ詠嘆法」と「-サーサ」を用いた当該表現とを同一視して良いものかどうか、その実態記述の結果から考察したい。

### 2. 先行研究

第2章では、これまでに「-サーサ」型の表現に言及のある論考について、発表順に追っていくことにより整理していきたい。整理の中で、当該事象を解釈する上での問題点についてもあわせて明らかにしたい。

当該事象について初めて報告がなされた論考は、原田(1953)である。同書140頁には次のような1文がある。

熊本方言の形容詞の表現形式に、感動的表現としての「サ」語尾がある。「アノミセノタカサタカサ」というよう。(傍線原文)

この記述によって、初めて、「タカサタカサ」という「-サ」を繰り返す形式を持つ表現が肥筑方言に存在することが明らかになった。同書中には、当例以外の「-サーサ」形式を持つ表現の例は挙げられておらず、また、「-サ」型との差異などについての言及もない。従って、当例は「感動的表現としての「サ」語尾」の代表的1例と認められて冒頭に挙げられたものかと推測される。

同書の記述からは、「-サーサ」型の表現の特質について明らかにすべき2点が浮かび上がる。まず、「-サー

「サ」型の表現が「形容詞の表現形式」であるかどうか検討する必要があるということである。次に、当該事象は「感動的表現」であるかどうか確認する必要があるということである。文法論に関わる前者については稿を改めたいが、後者については第6章で確認したい。

次に見られる報告は、秋山(1961)である。この論考中には、「サ詠嘆法」の例とされるものが4例挙げられているが、そのうちの3例は「ワイタ!アン山ノウツクシサ!」「アヤツガコスサガナ」「トテン気持ノ良サガナー」というように「-サ」型の例である。これらとともに挙げられているのが、

(2) アノ店ノ(値段ノ)高サ高サ!

という「-サ-サ」型の例である。同論考中にも「-サ」型との差異についての言及はなく、ここでもまた「-サ-サ」型と「-サ」型は同質の表現であると認められているものと推測される。

次に見たいのは、同筆者による秋山(1969)である。この論考は、熊本県牛深市深海町の「形容語」の調査報告であるが、ここには、

サ語尾は和歌におけるサ止め・体言止めのばあいと同じく、文における感動的終結陳述にのみ用いられる。したがって終助詞とはよく連続し、また繰り返して表現される(コン海ノ深サ深サ!)ことがむしろ一つの基本と言って良く、また強調のため語尾のサを、2拍あるいは3拍にも長音化し高音化することが、まれではない次第である。(462~463頁)

という解釈が施されている。

この論考では、当該「-サ-サ」型の表現がサ語尾の「形容語」の「一つの基本」と捉えられている点に注目されよう。このサ語尾の「形容語」というのは「サ詠嘆法」のことを指していることが明らかであるが、このことから推測されるのは、当論考では「サ詠嘆法」の「基本」的な用法が、当該「-サ-サ」型の表現であると解釈されていることである。

さらに、同論考によると、サ語尾の「形容語」には、4点の特質が認められるようである。まず、和歌におけるサ止め・体言止めと同じものであること、次に、感動的終結陳述に用いられることである。さらに、終助詞とはよく連続すること、最後に、語尾のサが2拍あるいはそれ以上に長音化・高音化することである。これらのうち、文法論に関わる前二者、すなわち、和歌におけるサ止め、体言止めと同じものであることと、感動的終結陳述に用いられることについては、稿を改めて実態を確認した上で論じたいが、後二者については、第4章以下で見たい。

次に「-サ-サ」型の表現について言及があるのは、神部(1980)である。同論考には熊本市と天草下島における事例として、

(3) コショ-シャノ オーサ オーサ。(故障車の多いこと多いこと。《中年の運転手》)

(4) イッタサモ イッタサ。(痛いこと痛いこと。《けがをした中年婦人》)

の2例が挙げられ、「このように、二回重ねておこなわれることもあって、盛んである。」との記述がある。

当論考での挙例には例(4)に見られるように「-サ」と「-サ」の間に助詞「も」が挟まれた例があるが、このような助詞を介在させる形式を持つ表現が他にもあるのかという点と、「-サ-サ」型の表現は盛んに用いられているのかという2点を、明らかにすべき点として指摘できよう。「-サ-サ」型の表現の盛衰については、分布調査などの後に稿を改めて報告したい。

上述の秋山氏は、「-サ-サ」型の表現について、他の論考でも挙例されている。秋山(1984)は、「九州方言にある、古語法的要素の基本と思われるものを数項目述べ」たとされるものであるが、この中に「サ詠嘆法」が一当該論考では「さ語法」と呼ばれている — 例示されている。ここに挙げられているのは、『肥後昔話集』という民話資料からの引用であるが、関連部分を同論考から引用すれば、

ソシタラ、ヌシャ(お前)腹鼓ノ調子ガ(このガはノでもよい)一遍ニ急調子ニ変ッテ、ギヤアギヤア言ウチネ、面白サ面白サ、ジツ見トラシタバッテン…。(140頁)

というようなものである。上記の引用文中、「(お前)」「(このガはノでもよい)」という2点の注記、「面白サ面白サ」の傍線、文末の「…」は、全国昔話資料集成 6 による『肥後昔話集』には見られないものであり、さらに、仮名がカタカナ表記に改められている点と合わせて、秋山氏による解釈が加えられた表記である。

また、秋山(1992)には、

(5)も一恥ずかっさ、恥ずかっさー。

という例も見られる。

このように「-サーサ」型を「基本」とする立場であるからか、どちらの論考にも繰り返さない「-サ」型の「サ詠嘆法」の例は見られず、「-サーサ」型のみ挙例となっている。また、どちらの論考にも、この表現法の解釈などは見られない。なお、ここで見てきた「-サーサ」型の表現が「サ詠嘆法」の「基本」とする説はこの後、再検討されたり引き継がれたりすることなく、どの論考にも言及されていないということを付言しておきたい。

最後に、熊本県宇城市の形容詞の体系的な記述報告がなされている村上(2006)を見てみよう。この報告には、

(6)アカサアカサー

(7)アコナサアコナサー

(8) (突然雷が落ちる音がして)ワァー オトロシサオトロシサー (ワァー、怖い)

(9) (友人から珍しいおみやげをもらって)アラー コガン メズラシカ モンバ モロテ ウレッサーウレッサー (あらー、こんな珍しいものをもらってうれしいなあ)

(10) (近頃親戚が立て続けになくなって)コノゴロワ シンセキガ タテツヅケニ シナシタケン カナシサカナシサー (この頃親戚が立て続けになくなって悲しいなあ)

というような例文が、繰り返さない「-サ」型の「アカサー」「アコナサー」「オトロシサー」「ウレッサー」「カナシサー」とともに並べられている。

この論考では、形容詞のパラダイムの中の表出の語形に、「サ詠嘆法」も「-サーサ」型の表現もどちらも組み入れている。つまり、「-サ」や「-サーサ」は形容詞の語形変化のうち、表出を表す語形とされるのである。この点からは、原田(1953)を継承しているとも考えられようか。

さらに、この語形の特質として、次の5点を挙げている。第1に「-サーサ」型の表現は、「サ詠嘆法」の「-サ」に比べてその程度がさらに強調される」ということである。第2に「標準語のように一語文で使用されるだけでなく、(中略)文でも使用が可能である」ということである。第3に「<過去>の場合、次のように使用できる場合がある」として、

(11)オトイ キンジョンヒトン ソーシキデ (私は)カナッサカナッサ/ホカン ヒトタチモ ミンナ ナキヨラシタ (一昨日近所の人の葬式で私は悲しくて悲しくて、みんな泣いていらっしやっ)

という例を挙げている。第4に例(11)のように「さらに文が続いていく場合にも使用可能だが、「~サ」にはそのような用法はない」ということである。第5に「この「-サ」「-サーサ」の形式も高年層ではよく使用されているが、30代、さらに若い世代では衰退傾向にあるようである」とある。

第5番目に挙げた衰退については、「サ詠嘆法」自体の衰退が住田(1986)や岡野(1988)などによって指摘されており、「-サーサ」についても推測されるところではあるが、筆者は当該「-サーサ」型について、衰退傾向にあることを示す根拠となるデータを得ていない。この点については後日、改めて論じたいが、その他の4項目は第4章以下で確認したい。

専ら挙例のみが見られ、解釈などは示されない論考がこの他3篇ある。まず、田中(1982)には、熊本方言の例として、

(12)アスコン ミセノ タカサ タカサ

という表現が、「コン ダイコンノ フトサ」「ナンサマ ヒトノ オーサガナー」等と並べられている。

村上(2002)には、

(13) サムサ サムサ

(14) イタサ イタサ

の2例が、「イタサ!」「スクサ!」とともに挙げられている。村上(2003)にも、

(15) 今日は 寒サ寒サ、凍ゆっこたる

今日は本当に寒い、凍えそうだ

という例を「寒サ!」の例に並べて挙げている。

以上見てきたように、「-サーサ」型の表現の特質を明かにするための価値ある指摘がなされた論考はあるものの、当該事象の文法的・表現的的特質を実例から帰納的・総合的に明らかにした研究はまだ見られないようである。これは、従来、外形の類似から当該事象は「サ詠嘆法」の1種(もしくは、これこそが「基本」)として捉えられ、両者の差異への着目は研究者の注意を逃れてしまったものと考えられる。

しかしながら、本稿では、「-サ」型表現の「サ詠嘆法」と「-サーサ」型表現との間には看過できない差異が存在することを認め、両者を同一の事象として一括すべきでないとの私見を提示したい。第4章以下において実例を分析し、その所以について考察していきたい。

### 3. 調査概要

第3章では、本稿で分析に用いる実例が、どのような調査によって得られたものなのかについて記しておきたい。

本稿で用いるデータは、筆者自らが行った臨地調査によって得たものである。調査は、1993年8月22日から2005年9月7日までの間に断続的に行われた。話者は、1895年生まれから1972年生まれまで、福岡・佐賀・長崎・熊本 の4県出身の、男性35名・女性36名の計71名である。

調査は「サ詠嘆法」の実態を明らかにするために、「-サ」と副詞や助詞の共起関係を中心に尋ねたものである。調査方法は、調査者が共通語で例文を示し、話者が方言で答えるという、いわゆる翻訳式調査法をとった。話者の回答は調査中に聞き取りながら記し、調査の様子はカセットテープに録音した。「サ詠嘆法」についての質問をする中で、「-サ」を2回繰り返すことができるかどうか、例文を示すなどして尋ねた。その後、「-サ」や「-サーサ」の前の助詞を他のものに替えることができるか、終助詞を下接可能かどうかなどの確認を行った。

当該「-サーサ」型表現の実例の得られた話者は、福岡県(9名中)3名、佐賀県(9名中)4名、長崎県(8名中)2名、熊本県(20名中)14名の計23名であった。

## 4. 「-サーサ」型の表現の音声的特質

第4・5・6章では、臨地調査で得られた実例を帰納的に分類・整理することによって、「-サーサ」型表現の特質について、音声的、文法的、表現的のように大きく3つに分け、それぞれの特質を明らかにしていきたい。まず第4章では、音声的特質に着目して記述していきたい。なお、音声的特質についてだが、語尾の長呼についてとアクセント・イントネーションについての2点の特質を明らかにしたい。

### 4.1. 語尾の長呼

音声的特質の第1点目は、語尾の長呼についてである。「-サーサ」の後部要素の「-サ」が長音となるものここでは長呼と呼ぶ。結論から言うと、「-サーサ」型の表現では、語尾を長呼することは稀であるということができるようである。筆者の臨地調査によって得られた長呼の見られる実例は、2例のみであった。まず、長崎県西彼杵郡琴海町(現長崎市)出身の昭和26年生まれの女性話者から教えていただいた、

(16) (あの店の値段の)高サ高サー。〔N1951F〕<sub>2</sub>

という例である。さらに、福岡県久留米市出身の昭和46年生まれ的女性話者から教えていただいた、

(17) キツァキツァー。〔H1971F〕

という例である。例(17)の「キツァ」はキツサの縮約形であるが、これは、疲れた・しんどいという意味で用いられるキツカのサ語尾化したものである。この縮約形「キツァ」は、臨地調査中6名から聞かれたが、当例以外、長呼するものはなかった。

臨地調査によって得られた実例は上記の2例だけであるが、では、先行研究には長呼する例がどのくらい見られるのだろうか。先行研究で「-サーサ」型の表現が取り上げられている論考は10篇あり、実例は16例挙げられている。このうち、短呼形は8篇の論考に10例見られるのに対し、長呼形は2篇の論考に6例見られる。

第2章の先行研究の整理の中で、秋山(1969)を取り上げたが、「また強調のため語尾のサを、2拍あるいは3拍にも長音化し高音化することが、まれではない次第である。」とある。この記述は、サ語尾の「形容語」、すなわち本稿で「サ詠嘆法」と呼ぶ表現一般についての記述であると理解できるものであるが、この記述の直前には、「また繰り返して表現される(コン海ノ深サ深サ!)」ことがむしろ一つの基本と言って良く、」とも書かれており(本稿第2章の引用部を参照されたい)、この長呼するという特質は「-サーサ」型表現にも該当するとされるものかとも読み取れよう。これを裏付けるかのように、秋山(1992)には、

(18) も一恥づかっさ、恥づかっさー。(5)の再掲

のような長呼する実例が挙げられているが、秋山氏によるその他の論考を確認しても長呼形の挙例はこの1例のみのようである。

その他の先行研究に見られる長呼形の実例には、村上(2006)の、

(19) アカサアカサー((6)の再掲)

(20) アコナサアコナサー((7)の再掲)

(21) (突然雷が落ちる音がして)ワァー オトロシサオトロシサー(ワァー、怖い)((8)の再掲)

(22) (近頃親戚が立て続けになくなって)コノゴロワ シンセキガ タテツヅケニ シナシタケン カナシサカナシサー(この頃親戚が立て続けになくなって悲しいなあ)((10)の再掲)

(23) (友人から珍しいおみやげをもらって)アラァー コガン メズラシカ モンバ モロテ ウレッサァー ウレッサァー(あら、こんなめづらしいものをもらってうれしいなあ)((9)の再掲)

の5例がある。これらの例のうち例(23)は、「-サーサ」の前部要素の「-サ」までもが長呼している点で非常に珍しく、先行研究において他には見られない形式である。筆者の臨地調査でも前後の「-サ」がどちらも長呼であられるというこの形式は出現しなかった。

このように、「-サーサ」型の表現での長呼形は、臨地調査では現れにくく、先行研究においても挙例されるものは多くないことから、稀にしか出現しないものということができるとはなかろうか。なお、長呼形を挙例している論考、すなわち、秋山(1992)も村上(2006)も、どちらも熊本方言を研究対象にするものであることに注意される。熊本方言では、他の方言よりも長呼することが多いということかもしれない。そうであったとしても、濱中(2002)にある「サ詠嘆法」の語尾は、必須ではないものの長呼することが多いという実態と、本稿で確認した「-サーサ」型の表現において長呼は稀にしか出現しないという実態とは、何らかの理由から異なる様相を見せていると言えるであろう。

## 4.2. アクセント・イントネーション

ここからは音声的特質の2点目であるアクセント・イントネーションについて見ていこう。「サ詠嘆法」の「-サ」と「-サーサ」型の表現とを対照したときに最も異なる特質とも言えるのが、このアクセント・イントネーションである。

まず、アクセントについて見てみよう。「サ詠嘆法」や「-サーサ」型の表現が用いられている肥筑方言域は、上村(1983)によれば、無アクセント、もしくは、二型アクセントが主に行われる地域である。当該事象のアクセントを見てみると、例えば、「高サ高サ」の場合には、「タカサタカサ」のように前後両方のサだけが低いアクセント(ゴシック体で表示)で発音されることが多い。「良サ良サ」の場合は、前後両方のサだけが低いアクセントであった。このことから「-サーサ」の前部要素の「-サ」と後部要素の「-サ」とは、それぞれの語にアクセントの型が見られることから、別々の2語という意識で発音されていると言えるであろう。これに対し、「サ詠嘆法」の時には、例えば「タカサー」は、カから高く平板のアクセント、「ヨサー」はサから高く平板のアクセントであった。

次にイントネーションについて見てみよう。「サ詠嘆法」の「-サ」は、疑問のときのよう語尾を上げたり、がっかりしたときのように急激に下げたりすることなく、また、平常文のように自然に下降させることもない、平らな下げないイントネーションである。

これに対し、「-サーサ」型の表現の時は、前部要素の「-サ」でアクセントの上げ下げをし、後部要素の「-サ」でまた上げ下げを繰り返すという形を包み込んだ自然に下降させるイントネーションである。

「サ詠嘆法」のイントネーションを聞くと、この人は今、しみじみと感動しているのだな、ということが、また、「-サーサ」型の表現のイントネーションを聞くと、オーバーに表現しようとしているんだな、もしくは、おもしろそうに強調しているんだなということが、「サ詠嘆法」や「-サーサ」型の表現を使用したり理解しているものには受け取れる。例えば、「-サーサ」型の表現の後部要素の「-サ」のアクセントとイントネーションを用いて発話した場合、聞き手には詠嘆していることは伝わらず、強調しているのだなというように受け取られるであろう。「サ詠嘆法」の「-サ」のアクセントとイントネーションを用いて「-サ」を繰り返したとしても、それは、感動・詠嘆の気持ちが2度繰り返されたということが伝わるだけであって、「-サーサ」型の表現にはならないものと思われる。

なお、先行研究で「-サーサ」型の表現がどのようなイントネーションで発話されるのかについて言及のある論文はない。

#### 4.3. 「-サーサ」型の表現の音声的特質のまとめ

以上、「-サーサ」型の表現の音声的特質について述べてきた。「-サーサ」型の表現では、長呼することは珍しく、短呼が一般的であること、イントネーションが感動を表すイントネーションではなく、「サ詠嘆法」のイントネーションとは全く違うことの2点を明らかにした。

### 5. 「-サーサ」型の表現の文法的特質

次に、文法的特質を見てみよう。ここでは「-サーサ」型の表現の構成要素に着目し、専ら外形的に確認される客観的事実に限って述べていきたい。濱中(2014)では、「サ詠嘆法」について、「-サ」のみで現れる形式を「 $\alpha$ 型」、他の語句とともに現れるものを「 $\beta$ 型」と呼んで区別している。これに倣い、本節においても「-サーサ」のみで出現する事例を $\alpha$ 型、「-サーサ」以外の語句と接して出現する事例を $\beta$ 型と仮称する。

#### 5.1. $\alpha$ 型

ここでは「-サーサ」のみで現れる $\alpha$ 型について見ていこう。 $\alpha$ 型の「-サーサ」型の表現は、

(24) フトサフトサ。[H1917M]

(25) 高サ高サ。[N1927M]

(26) ムゾサムゾサ。(かわいいこと かわいいこと) [K1935M]

のように多く見られるものである。このような「-サーサ」の前後に何も接することのない $\alpha$ 型の事例が最も多く得ら

れた。

また、いわゆる感動詞とともに用いられるものを濱中(2014)では、 $\alpha$ 型に準ずるものとして $\alpha_1$ 型とするが、この例として、

- (27)アー ウマサウマサ。[K1919F]  
 (28)ア ウツクッサウツクッサ。[K1914F]  
 (29)ドーカ キレーサキレーサ。[K1940F]  
 (30)ワー 寒サ寒サ。[K1935F]

などが見られた。様々な感動詞と自由に接して用いられるようである。

## 5.2. $\beta$ 型

ここでは「-サ-サ」が他の語句と接して現れる $\beta$ 型について見ていこう。濱中(2020)では、 $\beta$ 型の「サ詠嘆法」の実例を大きく2つに分けていた。単文で現れる実例( $\beta_1$ 型)と複文で現れる実例( $\beta_2$ 型)である。これに倣い、 $\beta$ 型の「-サ-サ」型の表現の実例もまた2つに分けたい。5.2.1. では $\beta_1$ 型を整理し、5.2.2. で $\beta_2$ 型を整理したい。

### 5.2.1. $\beta_1$ 型

ここでは単文で現れる「-サ-サ」型の表現について、どのような語が接するかという点で分類していきたい。

まず「-サ-サ」に前接する語句を見てみよう。最も多くの実例が得られたのは、先行する体言と「-サ-サ」とが接するものである。

- (31)今日ノ 芝居ノ 面白サ面白サ。[H1913F]  
 (32)コノバナナ 高サ高サ。[H1917M]

例(31)のように助詞を介して接する例は多くみられるが、例(32)のように助詞を介さない例はほとんど得ることができない。得られたのは当例のみであった。先行する体言と「-サ-サ」が助詞を介して接する時に用いられる助詞は、ノ(ン)・ガ・ワである。ノ(ン)を介して接する例としては上例(31)のほか、

- (33)アン犬(イン)ノ オトッサオトッサ。(あの犬の怖いこと怖いこと)[K1936M]  
 (オトシカ(怖い)のサ語尾化したもの)

- (34)畑仕事ン キツァキツァ。[K1919F]

が得られた。ガを介して接する例としては、

- (35)子ドンガ シェカラッサシェカラッサ。(子どもがうるさいことうるさいこと)[K1929F]

が得られたが、これが唯一の例で、助詞ガが用いられるものは他にはない。ワを介して接する例としては、

- (36)ココワ(は) ヨサヨサ。スズシューシテ。(涼しくて)[K1919F]  
 (37)アー モー 今日ワ(は) キツァキツァ。[K1919F]  
 (38)アン時ン 仕事ワ(は) キツァキツァ。[S1940M]  
 (39)アノ店ワ(は) 高サ高サ。[S1940M]

など、複数の実例が見られた。

「サ詠嘆法」について書かれた、濱中(2000)には「ワの後に「-サ」がくることはない。話者の内省によると、「-サ」の前にワが来ることは有り得ないようである。」とある。濱中(2002・2020)にも話者の内省情報を根拠にした同様な記述が見られ、助詞ワが用いられることは非常に稀であることが記述されている。「-サ」型の「サ詠嘆法」の実例に比べると「-サ-サ」を用いた当該表現は、出現する量が圧倒的に少ないにもかかわらず、ワが用いられた例が4例も見られたこと、さらに、「サ詠嘆法」の時とは異なり「ワがくることは有り得ない」と言ったような話者による内省情報がないことは、「サ詠嘆法」と「-サ-サ」型の表現との間に大きな違いがあることを示しているも

のと思われる。

次に、程度副詞が「-サーサ」に直接する例も見られた。

(40) チョット スユサスユサ。並ノ スユサジャナイヨネ。(とても酸っぱいこと酸っぱいこと。並の酸っぱさじゃないよね。)[K1943F]

(41) エライモン 高サ高サ。(とても高いこと高いこと。)[K1953M]

(42) ホート(本当に) コヤラッサコヤラッサ。[K1943F]

この3例はともに、標準語の「とても」に当たるような程度副詞によって、スユサ(酸っぱさ)の程度や高サの程度が強調されている。得られた実例はこの3例のみであり、この形式の実例も得られにくいといえるだろう。

最後に、「-サーサ」の前部の「-サ」と後部の「-サ」との間に助詞「も」が挿入されている例を見てみよう。

(43) 重サモ重サ。[K1959M]

話者の内省によると、この「も」はこの位置に — 「-サ」と「-サ」との間に — つけることが多いとのことである。しかし、他の話者の実例も含め、「も」が挿入されているものは他には得られず、臨地調査で得られたのは唯一この例(43)だけである。同話者からは、この形式に類似する、「飲ミタカモ飲ミタカ」「重カモ重カ」のような例も得られた。この形式の例は先行研究にも見ることができ、神部(1980)に、

(44) イツサモ イツサ。(痛いこと痛いこと。《けがをした中年婦人》)[545頁]((4)の再掲)

という例が見られる。これらの例は、「飲みたい」ことや「重い」ことを強調する際に用いられている。

ここまで、単文の「-サーサ」型の表現について、どのような語が接するかという点で分類してきた。「-サーサ」の前に体言が接することはあるものの、実例として得られるものは非常に少なかった。その中でも、助詞ノ(ン)を介在させる例は比較的多くみられた。助詞ガを介在させる実例や、助詞なしで接する例は、出現が非常に少なかった。これに反し、助詞ワ(は)が接するものは複数確認された。「サ詠嘆法」の「-サ」が助詞ワと接する際には、「ワは用いない」とか、「ワの後に「-サ」がくることはない」といった話者の内省情報が確認されたことが濱中(2000)などにあるが、「-サーサ」型の表現では、このような内省情報は得られなかった。この事実は、「サ詠嘆法」と「-サーサ」型の表現との大きな違いであるが、その違いはどこにあるのかという点については、今後明らかにしていきたい。

## 5.2.2. $\beta_2$ 型

ここでは複文で現れる「-サーサ」型の表現について分類していきたい。山田(1908)による複文の3タイプごとに整理したい。

まず、有属文である。

(45) 誰モ オラントノ サミシササミシサ。

(46) 誰(ダン)モ オラントノ サミシササミシサ。

(47) 誰モ オラントン サミシササミシサ。

(48) 誰(ダン)モ オラントン サミシササミシサ。[以上4例、K1959M]

例(45)から(48)は「誰もいないの(こと)のさみしいことさみしいこと」と標準語訳できるかと思われるが、すべて前句と後句とが助詞「トノ(ン)」で結ばれた有属文になっている。得られた実例はこの4例のみである。先行研究には、有属文の実例は見られないようである。

次に、合文の実例である。合文の主句に「-サーサ」が見られる臨地調査で得られた例は、以下の例(49)が唯一のものである。

(49) 品モンワ(は) イーンダケド 値段ノ 高サ高サ。[K1943F]

接続助詞ケドで主句と伴句が結ばれている。先行研究では、村上(2006)に、



(50) (近頃親戚が立て続けになくなって)コノゴロワ シンセキガ タテツヅケニ シナシタケン カナシサカナシサー(この頃親戚が立て続けになくなって悲しいなあ)((10)の再掲)  
という実例が見られる。接続助詞ケンで主句と伴句が結ばれている例である。

最後に重文の実例を見てみよう。「サ詠嘆法」では、重文の下句が $\alpha$ 型のもの、 $\beta$ 型のもの、どちらも見られたが、「-サーサ」型の表現では、重文の下句が $\alpha$ 型のものがすべてである。

(51) ウチワ(は) スクーシテ(暖かくて) ヨサヨサ。[K1919F]

(52) 今日ワ(は) 雪ン降ッテ ヒヤサヒヤサ。(寒いこと寒いこと) [K1927M]

(53) 髪モ 結ッテ カワイサカワイサ。[K1940F]

得られた実例はこの3例のみである。上句末には接続助詞のテがすべての例で見られ、上句は下句の理由となっている。先行研究では、やはり、村上(2006)に、

(54) (友人から珍しいおみやげをもらって)アラー コガン メズラシカ モンバ モロテ ウレッサー ウレッサー(あら、こんなめずらしいものをもらってうれしいなあ)((9)の再掲)

(55) オトイ キンジョンヒトシ ソーシキデ (私は)カナッサカナッサ/ホカン ヒトタチモ ミンナ ナキヨラシタ(一昨日近所の人の葬式で私は悲しくて悲しくて、みんな泣いていらっしまった)((11)の再掲)

の2例が見られる。(54)は接続助詞テ、(55)はデで結ばれている。

ここまで、複文で現れる「-サーサ」型の表現を有属文・合文・重文に分けて整理してきた。有属文は「トノ」「トン」が前句と後句とを結んでいた。合文は、「ケド」が主句と伴句を結んでいた。重文は「テ」によって上句と下句とが結ばれていた。これらの例は、「サ詠嘆法」の複文の実例の構造と大きな違いはないようである。

しかし、非常に大きな違いが見られる事実、実例の量の多寡をあげることができよう。複文で現れる「サ詠嘆法」自体、数多くの用例が得られるようなものではなかったが、複文の「-サーサ」型の表現の実例は、はるかに得にくいものであった。

複文で現れる「-サーサ」型の表現についての記述の最後に、村上(2006)による、「さらに文が続いていく場合にも使用可能だが、「～サ」にはそのような用法はない」という記述に言及しておきたい。上記の例(55)について解説する中での指摘である。これは「-サーサ」が複文の前の句になることが可能であるという指摘であろう。「サ詠嘆法」と「-サーサ」型の表現との違いを示す重要な指摘である。しかし、上例(55)を見たとき、「カナッサカナッサ」までの句とこれ以降の句とが複文として一文を構成していると受け取ることが筆者には難しい。つまり、例(55)は、複文ではなく、「葬式で悲しかった」という文と「みんな泣いていた」という文と、2つの文で構成されているように受け取れるということである。村上氏は「悲しくて悲しくて」のように重文の上句に相当するかのような標準語訳を付されている。

「サ詠嘆法」はもっぱら詠嘆に用いられる形式であるため、当然、このような現れ方をするのではないのだが、「-サーサ」型の表現については、このような使われ方をするところがあるのかもしれない。このような「-サーサ」がさらに後ろに文をつなげていく例は、これまでの先行研究にも見られず、臨地調査でも現れなかった。「-サーサ」型の表現についてさらなる詳細な調査・報告が必要であろう。

### 5.3. 「-サーサ」型の表現の文法的特質のまとめ

ここまで、「-サーサ」型の表現の文法的特質を見てきた。 $\alpha$ 型の実例はある程度得られるものの、 $\beta$ 型は得にくいことが明らかになった。また、前接する体言との間に介入する助詞などもバラエティが限られている。終助詞が後接する例は、挙例から明らかなように、先行研究には見られず、臨地調査でも得られない。複文の実例もほとんど得られない。このような実態から、「-サーサ」型の表現は、あまり生産性がなく、定型表現化していると考えられよう。

## 6. 「一サーサ」型の表現の表現的特質

臨地調査で得られた事例の記述の最後に、表現的特質を見てみよう。濱中(2002)によれば、「サ詠嘆法」の表現的特質は、次の3点に集約される。すなわち、1点目は、独白に用いられる点である。2点目は、感動の表出に用いられる点である。3点目は、現場性が非常に高いということである。「一サーサ」型の表現についても、この3点についてそれぞれ確認していこう。

### 6.1. 「一サーサ」型の表現意図は詠嘆が中心ではない

「サ詠嘆法」の表現的特質の1点目の独白に用いられる点は、「一サーサ」型の表現にも共通する点である。例を挙げると、

(56) ウチワ(は) スクーシテ(暖かくて) 良サ良サ。〔K1919F〕((51)の再掲)

(57) 野菜ノ 高サ高サ。〔K1919F〕

の両例とも独白に用いるとの内省情報を伺った。独白に用いるとの内省情報は、この他、福岡県大野城市、熊本県山鹿市の話者からも伺った。しかし「一サーサ」型の表現は、独白に用いるのが中心の表現ではないらしい。

(58) 子ドンガ シェカラッサシェカラッサ。(子どもがうるさいことうるさいこと)《家の中で子供が走り回っているときに、一緒にいる大人の家族に訴えるとき》〔K1929F〕((35)の再掲)

(59) 今日ワ(は) 雪ン降ッテ ヒヤサヒヤサ。モー ノサンジャッタ。(今日は雪が降って寒いこと寒いこと。もう、たまらなかった。)《人に報告する時に》〔K1927M〕((52)の再掲)

(60) ホン ツンサツンサ。泳ガレンカッタバイ。(水の冷たいこと冷たいこと。泳ぐことができなかったよ。)《家に帰ってきて川の様子を報告するとき。》〔K1959M〕

これらの事例は、聞き手に訴えたり報告をするときの言い方であるとのことである。このほか、聞き手に向かって褒める言い方など、聞き手を要求するときに用いるという内省情報も得られている。

「サ詠嘆法」でも聞き手を要求するような内省情報はなくはなかったが、しかし、ごく稀であった。「サ詠嘆法」の表現意図はあくまで詠嘆の表出であって、それ以外は、派生的に少数の例が見られるだけであった。このような事情を濱中(2000)では、「周囲に人がいても、伝達を意図せずに「一サーサ」は使われる。」と説明している。

これに対し、「一サーサ」型の表現は、独白や感動の表出のために使われることが無いではないが、こちらがメインというよりは、聞き手に訴えかけるような表現として用いられることが中心のようである。事例も圧倒的に多く得られる。

「サ詠嘆法」の表現的特質の2点目の感動の表出に用いられる点について見ていこう。

(61) 速サ速サ。〔K1929F〕

(62) アノ 夕陽ノ 赤サ赤サ。〔K1943F〕

上記の例のように、「一サーサ」型の表現を感動した時に用いると内省して下さったのは、熊本県玉名郡玉東町の話者、八代市の話者である。

「サ詠嘆法」は、感動表出に用いるということが表現意図の中心であったが、「一サーサ」型の表現ではこれらは表現意図の中心ではないらしい。独白に使う、感動の表出に使うという話者は多くない。それよりも「サ詠嘆法」の時にはほとんど聞かれなかった、次のような表現意図についての指摘が多くあった。

(63) 富士山ノ 高サ高サ。モー コギャン(こんなに) 高カッタ。《高さを強調するときの言い方。感動しているわけではない。人に向かっていうときに使う。》〔K1940F〕

(64) (太い大根を見たときに) フトサフトサ。《おおげさな表現。》〔H1917M〕((24)の再掲)

(65) ワー アノオ嬢チャンノ キレーサキレーサ。目ノ サムルゴター。(目が覚めるようだ)《オーバーな表

現。》〔K1943F〕

(66) (値段の)高サ高サ。《値段の高さにあきれたように。》〔K1944F〕

このように、「-サーサ」型の表現は感動表出とは異なる表現意図を持つ言表であることは明らかであろう。このほかにも、

(67) 速サ速サ。《かけっこで足の速いことに感心して褒めるとき。》〔K1929F〕

(68) ヨッサヨッサ。(いいこといいこと。)《人のものをうらやんで。》〔K1959M〕

(69) アタガ ヨサヨサ。《「あなたばかり良い思いをして」とひがむとき。》〔K1959M〕

といった例が聞かれた。相手を褒めるときばかりでなく、うらやんだり、ひがんで嫌味を言ったりするときにも用いられるようである。

「サ詠嘆法」の表現的特質の3点目は、現場性が非常に強いということだが、「サ詠嘆法」と「-サーサ」型の表現との間で、決定的に異なるのは、「いま・ここ」でしか使えないのか、それとも「いま・ここ」を離れても使えるのか、という点である。濱中(2002)には、

話者の内省によると、過去のことにニガカーとは思うけれど、ニガサーと思うことはない、とのことである。ニガサーと思うのは、今現在、飲んだ薬の苦い味が口の中に残っている、まさにその時だけである、とのことである。

のように、「サ詠嘆法」は「いま・ここ」が表現の中心となっているという点についての説明がなされている。同様に、濱中(2000)には、「夕日ノ アカサー」という実例の後に、

(前略)眼前に夕日がなければならぬ。過去や未来の夕日について、「-サー」を用いて言及することは不可能である。

ともある。これに対し、「-サーサ」型の表現では、

(70) アン時ン(あの時の) 畑仕事ワ(は) キツサキツサ。《過去の体験を人に伝える時の言い方。》〔S1940M〕((38)の再掲)

(71) 富士山ノ 高サ高サ。モー コギャン(こんなに) 高カッタ。〔K1940F〕

(72) 速サ速サ。《運動会などで走ったのを見た次の日でも言える。》〔K1929F〕

(73) (店で値段を見て)アー 高サ高サ。《家に帰ってきてからでも言える。》〔K1927M〕

(74) 水ン ツンタサツンタサ(冷たいこと冷たいこと)。泳ガレンカッタバイ(泳ぐことができなかったよ)《家に帰ってきて川の様子を報告するとき。》〔K1959M〕((60)の再掲)

(75) アノ店ワ(は) 高サ高サ。《訪れたことがある店での過去の経験をいうときの言い方。》〔S1940M〕((39)の再掲)

(76) (あの時飲んだ)薬ン ニガサニガサ。《過去に飲んだ薬の味を思い出していうときの言い方。》〔S1970M〕

(77) (子どもたちの)カワイサカワイサ。《先日の幼稚園の子どもたちの遠足の様子を思い出しながら。》〔K1936M〕

というように、過去のことを振り返り、思い出しながら聞き手に伝えるというような場面でも用いることができるのである。現場性が非常に強く、このような場面では決して使うことができない「サ詠嘆法」の特質と、このような状況で使える「-サーサ」型の表現の実態との間には、非常に大きなちがひがあるということができよう。

先行研究を見てみると、村上(2006)には、

(78) オトイ キンジョンヒトン ソーシキデ (私は)カナッサカナッサ/ホカン ヒトタチモ ミンナ ナキヨラシタ(一昨日近所の人の葬式で私は悲しくて悲しくて、みんな泣いていらっしやった) ((11)の再掲)

という例が挙げられている。一昨日の葬式の話題が語られているが、ここで用いられている「-サーサ」は、「いま・

ここ」の感動の表出を示しているのではないということが明らかであろう。

このように「サ詠嘆法」は、必ず「いま・ここ」に詠嘆の対象がなければ発することができない表現であるのに対し、「-サー-サ」型の表現の場合は、「いま・ここ」を離れても用いることができるという、大きな違いが確認できた。

## 6.2. 「-サー-サ」型の表現の表現的特質のまとめ

以上、「-サ」型の「サ詠嘆法」と「-サー-サ」型の表現とを対照することによって、「-サー-サ」型表現の表現的特質を明らかにしてきた。「-サー-サ」型の表現的特質としては、次のようなことが確認できた。

まず、「サ詠嘆法」と同様、独白に用いられ、感動の表出を表すことがあることが明らかになった。しかし、これは「-サー-サ」型の表現の中心的な表現的特質ではない。「-サー-サ」型の表現では、聞き手に訴えたり報告をしたり、聞き手を要求するときに用いられることが多いようである。オーバーと感じられるくらい強調したり、相手を褒めたり羨んだり、ひがんで嫌味を言ったりするときにも用いられ、このような表現意図の方が独白や感動表出より多く用いられていることが明らかになった。

次に、「サ詠嘆法」と「-サー-サ」型の表現とが決定的に異なる特質が、「いま・ここ」で表せるような現場性についての違いである。「サ詠嘆法」はこれまでいくつも報告が見られるように、非常に現場性の高い表現的特質がある。感動の対象などが眼前にないと「サ詠嘆法」は使うことができないのに対し、「-サー-サ」型の表現は、昨日のことなど、過去のことに言及する際にも用いられ、感動の対象が眼前になくとも使用できるという違いがある。

## 7. おわりに

本稿では、これまで「サ詠嘆法」と同一事象であるということが自明のものとして扱われてきたと思われる「-サー-サ」を用いた表現について、音声的・文法的・表現的特質を記述し、この表現を「サ詠嘆法」と同一に扱って良いものかどうか判断するための実態について記述してきた。

第2章では、「-サー-サ」に言及のある先行研究を整理した。ここでは、「-サー-サ」型の表現の特質を明らかにするための価値ある指摘がなされた論考はあるものの、当該事象の音声的・文法的・表現的特質を実例から帰納的・総合的に明らかにした研究はまだ見られないことを明らかにした。これは、従来、外形の類似から当該事象は「サ詠嘆法」の1種として捉えられ、両者の差異への着目が研究者の注意を逃れてしまったからであろうと推測した。

第3章では記述に用いる実例などのデータを収集した調査の概要を示した。

第4章からは「-サー-サ」の実態を音声・文法・表現の面から明らかにした。まず第4章では、音声的特質について、語尾の長呼とアクセント・イントネーションの2点について「サ詠嘆法」との違いを明らかにした。

次に、第5章では、文法的特質について、「サ詠嘆法」と「-サー-サ」型の表現との違いを明らかにした。文法的特質としては、「サ詠嘆法」が骨子となる「-サ」だけで現れるのと同様、骨子となる「-サー-サ」形式だけで現れる。さらに、助詞を介すなどして体言と接するもの、程度副詞と直接するもの、複文で現れるものなど、「サ詠嘆法」と同様の文法的特質が見られる。しかし、「-サー-サ」型の表現の典型的で最も多く見られる形式は、本稿でα型と呼ぶ「-サー-サ」だけで構成されるもので、その他の形式で現れることは少ない。「サ詠嘆法」は、実例の数としては限られるかもしれないが、いろいろな形式の実例が得られた。これに対し「-サー-サ」型の表現はほとんどバリエーションが見られず、定型化しているものと推測される。

最後に、第6章では、表現的特質について違いを明らかにした。「サ詠嘆法」と決定的に異なる特質は、「いま・ここ」という現場性が強いかどうかということであった。「サ詠嘆法」は現場性が非常に強い表現であるのに対し、「-サー-サ」型の表現では現場性はまったく強くなく、過去の出来事を報告するような時にも、対象が眼前にない時にでも用いられる。「サ詠嘆法」が詠嘆のために用いられるのに対し、「-サー-サ」型の表現は詠嘆で用いら

れるものは少なく、強調などの他の表現意図で用いられることが多いことについても明らかにした。

第4・5・6章と、「-サーサ」型の表現の特質を明らかにしてきた。「サ詠嘆法」と「-サーサ」型の表現の両者は、形式の類似によって、これまでは同一視されることが多く、それぞれを切り離して論じられることはなかったが、ここまで見てきたように、それぞれの特質の異同を鑑みるに、両者は異なる表現法であると考えらるべきであるということが確認できたのではなかろうか。本稿が「-サーサ」型の表現を擬「サ詠嘆法」と仮称した所以である。

本稿の最後に、今後の課題を示しておきたい。「-サーサ」型の表現が、どのようにして生じた表現であるのかについては明らかでない。「重カモ重カ」のような形式を持つ強調表現などの影響を受け、用法が広がったのではなかろうかと推測する。「-サ」を用いる「サ詠嘆法」とのお互いの影響の受け与えについても明らかではない。

しかしこれを明らかにするためには、「-サーサ」型の表現について、いつごろから用いられるようになった表現なのか、いつから用法が広がったのかなどの根拠を示す必要がある。管見の限り、先行研究にもこのような指摘は見られないようである。したがって、「-サーサ」型の表現のさらなる実態記述と、いつからどのように使われるようになったのかという歴史の変遷について明らかにすることが今後必要となろう。

「サ詠嘆法」と同一視されてきたために、「-サーサ」型の表現の実態記述はなかなか進んでいない状況と書いて良い。擬「サ詠嘆法」のさらなる詳細な記述を今後の課題としたい。

## 注

- 1.「一遍」の「遍」字だが、秋山氏は竹冠の下に「遍」という文字を使用している。原文には竹冠はない。
2. 実例に対する注記などについてここで説明しておきたい。( )内には耳慣れない俚言などに対する標準語訳を付した。《 》内には、話者の内省による解釈や情報を示した。〔 〕内には、話者情報を付した。例(14)には「[N1951F]」とあるが、これは、長崎県「N」1951年生まれ的女性「F」話者から教えていただいたことを示している。この他のローマ字の意味は、福岡県「H」佐賀県「S」熊本県「K」、男性「M」である。

## 参考文献

- 秋山正次(1961)「3 熊本」『方言学講座』4 九州・琉球方言 東京堂
- 秋山正次(1969)「345 語彙(形容語の語構成)」『九州方言の基礎的研究』風間書房
- 秋山正次(1984)「九州方言の文法」『国文学解釈と鑑賞』第49巻1号 至文堂
- 秋山正次(1992)「熊本方言」『国文学解釈と鑑賞』第57巻7号 至文堂
- 岡野信子(1988)「2 感嘆表現法さまざま」『福岡県ことば風土記』葦書房
- 上村孝二(1983)「1 九州方言の概説」『九州地方の方言』講座方言学 9 国書刊行会
- 神部宏泰(1980)「九州西部方言の形容語カ語尾形容詞を中心に」『国語教育研究』26(神部宏泰(1992)『九州方言の表現論的研究』和泉書院に改稿の上再録)
- 木村祐章編(1974)『肥後昔話集 -熊本-』全国昔話資料集成 6 岩崎美術社
- 住田幾子(1986)「肥筑方言に見られる心情訴え文について」『日本文学研究』22 pp.1-10 梅光女学院大学
- 田中成子(1982)「熊本方言における格助詞『ノ』『ガ』について」『音声・言語の研究』2 pp.64-83 東京外国語大学音声学研究室
- 濱中誠(2000)「佐賀県武雄市における「サ詠嘆法」の実態報告」『都大論究』第37号 pp.28-38 東京都立大学国語国文学会
- 濱中誠(2002)「熊本県下益城郡松橋町における「サ詠嘆法」の実態報告」『都大論究』第39号 pp.29-

## 45 東京都立大学国語国文学会

濱中誠(2012)「[「サ詠嘆法」の研究史とその問題点 -文法的特質に着目して-]」『西山学苑研究紀要』第7号  
pp.1-20 京都西山短期大学

濱中誠(2014)「[「サ詠嘆法」の文法的特質 -一語文の実例を中心に-]」『西山学苑研究紀要』第9号  
pp.81-96 京都西山短期大学

濱中誠(2020)「[「サ詠嘆法」の文法的特質]」『岐阜聖徳学園大学紀要』第59集 pp.89-106 岐阜聖徳学園大学

原田芳起(1953)「熊本方言の文法ところどころ」『熊本方言の研究』日本談義社

村上智美(2002)「熊本方言における『寂ッシャシトル、高ッシャシトル』という形式について」『国語学会2002年度春季大会要旨集』国語学会

村上智美(2003)「形容詞のパラダイム熊本県松橋町方言の場合」『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究』平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書3西日本編  
研究代表者:工藤真由美

村上智美(2006)「熊本県宇城市松橋町方言の形容詞」『方言における述語構造の類型論的研究II』平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書 研究代表者 工藤真由美

山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館出版

※本稿は、2008年に大阪大学に提出した博士学位論文『肥筑方言における「サ詠嘆法」の記述的研究』「第3章「サ詠嘆法」の実態とその特質」の一部を再検討の上、書き改めたものである。